

## 資料紹介

## 新史料『生活書店会議記録 1938-1939』について

楊 韜

昨年刊行の本誌第19号にて、上海韜奮紀念館編『生活書店会議記録 1933-1937』を紹介したが、今回はその続編を取り上げる。2019年7月、同じく中華書局から上海韜奮紀念館編『生活書店会議記録 1938-1939』（図版1参照）は出版された。上海にある韜奮紀念館館蔵文献叢書の継続刊行であり、待望の新史料である。

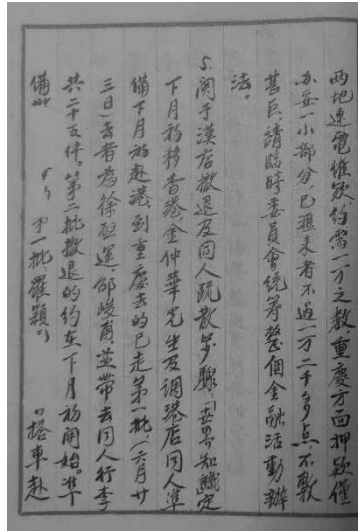
生活書店は、中国近現代史を専門分野とする研究者にはよく知られている出版機関であろう。「近代中国の出版メディア事業の発展史において、商務印書館、中華書局、開明書店など規模が大きく、広範囲に及ぶ影響力を持つものはいくつもあるが、なかでも生活書店はその読者重視の姿勢、及び合作社的経営方式によって人々の関心と支持を集めていた。読者（消費者）と距離が近く、信頼関係を築いていた生活書店は、1930年代に様々な募金活動を成功させた。そして、その活動は抗日運動の支援へとつながっていった。戦時下、極めて困難な経営状態に直面したが、様々な工夫によってコストを抑え、出版事業を存続させた。生活書店の発展プロセスは、近代中国の出版メディアの一モデルとして看做すことができよう。」（拙著（2015）、246頁）



図版 1

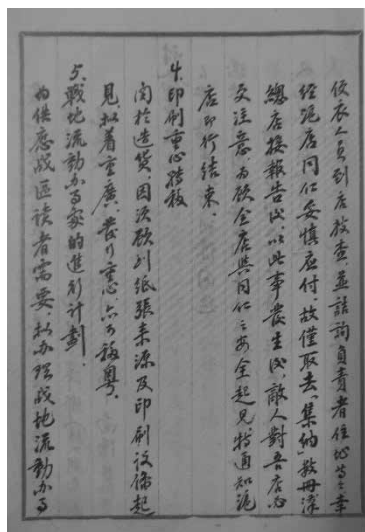
今回出版された『生活書店会議記録 1938-1939』は、日中戦争の全面勃発の影響を受け、生活書店の総本店は上海から武漢（漢口）へ、さらに重慶へ移転した時期にあたる書店内部の会議記録である。収録されているのは、主に「臨時委員会会議記録」・「業務会議記録」・「理事会会議記録」・「付録資料」の四種類である。以下、主に二つの側面から、この資料集が（新史料として）価値が高い点を簡単に述べておきたい。

第一には、戦時下の生活書店（生活出版合作社）の内部組織に関する記録（図版2参照）である点である。日々変動する戦局による影響は大きい。とりわけ、戦場に近い地域にある支店の運営は厳しい。時には、急な撤退に強いられることもある。このような特殊な状況を対応するため、人員配置から特別手当支給まで、様々な対策が打ち出されていた。今回出版された『生活書店会議記録 1938-1939』は、戦時下における内部管理や臨時的な対応策に関する記録が多く収録されているため、非常時の社内状況の詳細を知るには大きな意義はある。



図版 2

第二には、戦時時期における生活書店の経営管理に関する記録（図版 3 参照）である点である。かつて、筆者はこの問題を取り上げ、当時における生産コストの抑制、及び輸送・郵送・為替といった流通ルートの確保、などの工夫を考察した（拙著（2015）、第六章）。しかし当初の検証にあたっては、北京印刷学院編『店務通訊排印版（上・中・下）』（学林出版社、2007）が唯一の手かがりであった。今回出版された『生活書店会議記録 1938-1939』のなかに関連記録があり、『店務通訊排印版』との照合が初めて可能となった。



図版 3

以上、簡単ながら『生活書店会議記録 1938-1939』に史料としての価値が高いことを述べた。今後、1940年以降の「生活書店会議記録」の復刻出版を大いに期待したい。

参考文献：

上海韜奮紀念館編『生活書店会議記録 1933-1937』（中華書局、2018）

上海韜奮紀念館編『生活書店会議記録 1938-1939』（中華書局、2019）

韜奮紀念館・北京印刷学院編『店務通訊排印版（上・中・下）』（学林出版社、2007）

楊韜『近代中国における知識人・メディア・ナショナリズム：鄒韜奮と生活書店をめぐる』（汲古書院、2015）